

04

March 2015

学芸員課程 Newsletter

Newsletter from Course
for Prospective Museum
Workers, Faculty of Letters,
Okayama University

編集・発行：岡山大学文学部学芸員課程
(編集 光本 順)

発行日：2015年3月6日

contents

特集 第2回学芸員課程フォーラム&展示会 光本 順……	1
講演要旨1 「重要文化財と大学の学術資料 —考古資料を中心に—」 田辺 征夫……	2
講演要旨2 「楯築弥生墳丘墓の世界」 福本 明……	3
講演要旨3 「池田家文庫の保存・公開・活用」 倉地 克直……	3
報告要旨「大学所蔵資料を活用した学芸員課程の取り組み」 光本 順……	4
第2回学芸員課程企画展 「重要文化財と岡山大学」……	4
NEWS & TOPICS……	4

特集 第2回学芸員課程フォーラム&展示会

平成26年12月10日に岡山大学文・法・経済学部講義棟にて、第2回学芸員課程フォーラム「重要文化財と大学—学術資料の保管・公開・活用の未来—」(主催:文学部学芸員課程)を開催しました。今回のテーマは、大学が保管する学術資料をどのように守り、かつ活かしていくことができるかについて、広く議論することを目指したものです。平成26年度大学機能強化戦略経費「大学所蔵資料を活用した実践型学芸員養成教育の高度化」(代表:金関猛・文学部長)に基づき行いました。

平成25年度よりはじまった本学新学芸員課程の紹介を含めた金関文学部長による開会挨拶の後、3名の先生方による講演と1名の報告、そして文学部学芸員課程専門委員会の新納泉委員長を司会とする全体ディスカッションを行いました。特別講演の田辺征夫先生は、日本の重要文化財制度の特色と大学の学術資料との関係について考古資料を中心に議論。また貴重な学術資料がもた

らす大学への波及効果についてお話いただきました。次に福本明先生は、岡山大学が発掘調査し、出土品を保管する倉敷市楯築弥生墳丘墓(弥生時代)の歴史的かつ学術的意義について詳細に検討。一方、倉地克直先生は岡山大学の先進的取り組みとして、池田家文庫をはじめとする歴史史料の保存と活用について紹介し、学術資料のあり方に関する提言をいただきました。

また大学所蔵資料に基づく実践型教育の一環として、学芸員課程では12月3~12日の期間に、新装なった岡山大学附属図書館・中央図書館1階ラウンジにて、第2回学芸員課程企画展「重要文化財と岡山大学」を開催。さらにこの1年間で、楯築弥生墳丘墓出土品のリスト化や展示・収蔵施設の環境調査なども実施してきました。

なお、こうしたフォーラムおよび展示会等の試みは、平成25年度(テーマ:「地域の博物館と大学」)に引き続き2回目となります。



上段 金関文学部長によるフォーラム開会挨拶

下段 フォーラムでのディスカッション風景

右段 考古資料収蔵庫における室内空気汚染調査の風景

講演



講演要旨 1

特別講演

「重要文化財と大学の学術資料 —考古資料を中心に—」

田辺 征夫・奈良県立大学特任教授

(前独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所所長)

●日本の文化財指定制度の歴史と役割 日本の現代の制度につながる文化財の制度は明治時代にさかのぼります。明治初年、廃仏毀釈が起り貴重な文化財が散逸しました。その反動で明治4年に「古器旧物保存方」が布告され、様々な文物の調査が始まります。明治10年代になると有名な岡倉天心を中心に古社寺の調査が行われ、明治30年にはようやく奈良時代以降の古いお寺を守るための「古社寺保存法」が制定されます。考古学の世界での具体的な動きとしては、明治32年「遺失物法」が布告され、発掘された考古資料を届け出ることが義務付けられました。さらには、古墳時代以降の資料は東京国立博物館に、それ以前の資料は東京大学が保存するなど文化財保存の枠組みも決まりました。これは昭和60年代、埼玉県の稲荷山古墳で出土した貴重な鉄剣を地方の博物館が保管することを許可されるまで続いたシステムです。そして大正8年には「史蹟名勝天然紀念物保存法」ができ、吉備大臣入唐絵詞の海外流出をきっかけに、昭和4年には有形文化財を保存する目的で「国宝保存法」が制定されます。最後に昭和25年、法隆寺金堂壁画焼失を機に、一つにまとめた「文化財保護法」が制定され、埋蔵文化財や無形文化財が加わります。その後、「伝統的建造物群」や「文化的景観」などの概念も加わって法律が整備され現在に至ります。文化財保護法が整備されることで、有形文化財の指定は、重要文化財、さらに重要なものは国宝に指定するという制度が確立するわけです。

指定制度に対する否定意見も昔からありますが、文化財というものが様々な価値を持っているなかで特にその価値が顕著なものを指定すると考えれば、指定制度は必ずしも悪い制度ではありません。指定制度は文化財の価値を顕在化させるという面で意味があり、それにより人々に文化財保護の意識が生まれてくるといえます。文化財を重要文化財や国宝に指定することで、それを生かした村おこしや町づくりにつながったり、それを管理する施設が作られたりという良い連鎖反応が起こる可能性もあります。今後指定制度をそのように活用していくことも重要であると考えられます。

●指定制度と考古資料 考古資料は基本的には有形文化財に含まれます。先ほどの吉備大臣入唐絵詞もそうですが、有形文化財は昔から美術的価値が問われています。過去に国

宝指定されている考古資料をみても全てが優品です。ところが考古資料の場合は、優品主義では資料の本当の価値が伝わりません。出土品は大体壊れて出てきますので、完全なものはそれほどありません。完全な一点だけが遺跡の価値を表すわけでもありません。指定文化財として本当の意味での学術的価値を求め、出土品の集合体が遺跡の価値を決めるという考え方をもとに、考古資料の場合、現在は一括指定を重視しようという流れになっています。加えて、村おこし、町づくりの面から考古資料は非常に大きな期待を持たれる時代となったことも間違いのないといえます。仏像や絵画作品などが新たに発見されることは特に地方ではほとんどありませんが、新たな考古資料の発見は充分にあります。新しい価値のある資産が誕生する可能性があるのが考古資料であり、まさに期待されるべき存在であることは事実です。

●重要文化財と大学 現在、国立大学は東京大学6件など計15件、私立大学は明治大学4件など計11件の指定考古資料を所蔵しています。高度経済成長期以前に大学が主体となって遺跡を調査していたころの資料は、まだ指定制度を積極的に活用しようという意識が高くなく、学術研究以外には用いられないままです。そのような歴史の流れから、これまで指定されているもののほとんどは自治体所有のもので、大学には指定考古資料が少ないのが現状です。また、指定されることによって価値が顕在化したものを管理する体制が十分に確保できない、という点も大学に指定考古資料が少ない理由といえます。しかし大学がこれまで考古学の調査・研究に果たしてきた役割は大きく、重要文化財になりうる資料はかなりあるはずで、大学の持つ資料が指定され、その価値が顕在化されることにより、学生が直接見たり触れたりすることができ、考古資料の大切さを学ぶことができます。指定資料の扱いは慎重さが必要で難しいですが、扱い方を学ぶことによって大切に心がまえも生まれます。指定をきっかけに施設の充実につながったり、上手に使えば大学のアピールになったりします。さらには学芸員制度と絡めて考えても、これから資格を取り世界に羽ばたく人たちが、最初の出発点で重要文化財や国宝に指定されているものの扱い方を学べるとすれば大変な財産になるといえます。

重要文化財と大学

—学術資料の保管・公開・活用の未来—

講演要旨2 「楯築弥生墳丘墓の世界」

福本 明・倉敷市教育委員会生涯学習部副参事



●**倉敷市楯築弥生墳丘墓とは** 私は倉敷市教育委員会で文化財保護を担当し、岡山大学が昭和51年から14年間に亘って行った楯築弥生墳丘墓の調査のうち第4次以降の調査に参加しました。楯築弥生墳丘墓は倉敷市庄新町に位置する弥生時代後期の墳墓です。80mを超える、弥生時代の日本列島最大の規模からも吉備地域の大首長、吉備の王というべき人物の墓であることが推定されています。調査は岡山大学の近藤義郎先生によって主導されました。調査によって、この墳丘墓は非常に珍しく歴史的にも価値があるということで昭和56年に国の史跡に指定されています。

●**楯築弥生墳丘墓から読み解く歴史** 遺跡から出土した遺物・遺構を詳細に検討することで、新たな事実や当時の人々の思いに迫ることができる点が、考古学の面白さだろうと思います。楯築弥生墳丘墓の特徴としては、①墳墓の円丘に沿って二重にめぐらせた列石とその間に敷き詰められた円礫、②墳頂にあたかも楯のように並べられ「楯築」の名前の由来ともなった立石、③棺の直上に敷き詰められた円礫堆などの外部施設、④複雑な模様彫りこまれた弧帯文石や特殊器台、特殊壺などの遺物が挙げられます。また棺からは中国大陸からの輸入品で非常に貴重

であった朱が全体で32kgも見つかっています。被葬者の骨は既になくなっており、わずかに2本の歯を残すのみでしたが、鉄剣や勾玉、や首飾りなどの副葬品はそのまま残されていました。

私は特に、円礫堆とその出土遺物に注目しています。円礫堆からは土製の勾玉や管玉、人形土製品や土器類、そして弧帯文石が割られた状態で出土しています。また炭や灰など火を用いた痕跡やモモなどの植物の種も見つかりました。これらの出土状況から、楯築弥生墳丘墓で行われた儀式は亡き王から次の王へと権力を引き継ぐ権力継承儀礼であると考えています。またその儀式は天皇の即位儀礼である大嘗祭のように夜に行われ、かがり火や松明の明かりの中で飲食をし、土器や土製品などを用いた何らかの祭祀儀礼を行ったのでしょうか。それが終わると役目の終わった弧帯文石を砕き、土器、土製品を円礫とともに棺桶の上へと盛り上げ、最後に特殊器台を円礫堆の上に置くといった様子を想像することができます。

講演要旨3 「池田家文庫の保存・公開・活用」

倉地 克直・岡山大学教授



●**池田家文庫とは** 池田家文庫は岡山藩主であった池田家が所有していた藩政資料65000点や書籍32000冊、絵図類3000点などからなります。岡山大学の創立にあたって岡山総合大学設立期成会によって寄贈されたもので、岡山藩の江戸時代初期から末期までの藩政資料が体系的に残されています。特に留帳類、すなわち事務記録が豊富で、藩や藩主の動きを追っていくことが可能です。例としては岡山藩の藩校の日誌で、藩校で何が行われたかがわかる『備陽国学記録』や、後楽園の管理を担当していた部署の日誌で、後楽園で行われた行事や来訪者のことが分かる『後楽園諸事留帳』が挙げられます。重要文化財に指定されているものは『信長記』という織田信長の伝記で、著者である太田牛一の自筆本です。なお、附属図書館には池田家文庫以外にも、特殊文庫として真庭・勝山藩の藩政資料や地方の有力者から寄贈された庶民資料などがあります。

●**池田家文庫の利活用と課題** 池田家文庫の利活用に関しては、まず藩政資料部分の全編マイクロ化・デジタル化が行われたことが挙げられます。絵図類は約3000点の内1800点ほどがデジタルデータ化され、岡山大学のホームページ上や岡山県立博物館の岡山大百科、岡山シティミュージアムなどで公開されています。また絵図類に関しては、平成9年から平成16年には岡山大学附属図書館で、平成17年からは岡山シティミュージアムで毎年絵図展を実施しています。絵図を中心とした展示会を毎年行っているのは全国的にも珍しい事例です。平成20年からは「絵図を持って城下町を歩こう」という公開講座を行っています。

この公開講座は図書館によって書籍化されていて、それを用いた地域の方による自主的な取り組みも行われています。

後楽園関連の資料を用いた活用事例としては、平成17年度から「子ども向け岡山後楽園発見ワークショップ」を、教育学部の学生と教員が後楽園を管理する郷土文化財団と共同する形で開催しています。これは池田家文庫に含まれる後楽園の絵図を持って、古い後楽園と現在の後楽園を比較するという参加型の取り組みです。

池田家文庫の資料を用いた書籍も複数出版されています。例えば『池田家文庫資料叢書』という本を4冊出版し、林原美術館との共同で『天下人の書状をよむ——岡山藩池田家文書』という本も出版いたしました。この本では岡山大学と林原美術館に分けられて所蔵されている信長・秀吉・家康らの書状類を一括に利用できるようにしています。

私は資料の価値を多くの人で再発見し、再発掘していくことが必要とされているなかで、デジタルコンテンツの系統的整備が求められていると感じています。これからはコンテンツをどう活用するかということを研究し、チームとして企画・実行していくことが必要とされてくるでしょう。研究と教育を結合し、そこに職員も主体的に参加するスタイルを作り出すことが重要だと思っています。

報告

報告要旨 「大学所蔵資料を活用した学芸員課程の取り組み」

光本 順・岡山大学准教授

本学では平成25年度から新学芸員課程の授業がはじまり、博物館資料保存論、博物館展示論などの科目も増えました。平成26年度は岡山大学戦略経費の配分を受け、「重要文化財」「学術資料」をキーワードにカリキュラムの体系化と、より高度な取り組みの実践を目指してきました。具体的には岡山大学が保管する倉敷市楯築弥生墳丘墓の考古資料を軸に、出土品のリスト化、展示・収蔵環境の調査、展示会、フォーラムを実施しました。

まず出土品のリスト化作業として、人文系博物館実習の一環で、岡山大学の地下収蔵庫にねむる楯築弥生墳丘墓出土品の箱台帳を作成しました。箱台帳は資料の整理から利活用に至るまでの基礎となります。1箱1箱の中身を確認し台帳に記入、資料を入れている汚れた袋の交換などを行いました。今後の出土品管理に繋げていきたいと考えています。

次に博物館資料保存論の一環で、考古資料展示室と地下収蔵庫を対象に展示・収蔵施設の空気汚染環境調査を行いました。空気汚染の1つのメルクマールである、有機酸とアンモニアの空气中濃度について、有機酸インジケータ、アンモニアインジケ-

タという簡易検査キットを用いて学生が測定しました。インジケータを設置し、1週間後に結果を確認してみると、展示室ではエアタイト・ケースで有機酸、展示ケース外でアンモニア濃度が高まっていました。地下収蔵庫では、アンモニア濃度の高まりが確認できました。結果がグレーゾーンのもの等により今後の検討が必要な部分もありますが、見えない空気汚染について考えさせられる取り組みとなりました。

展示会については、附属図書館1階ラウンジにて、解説パネルと実物資料による企画展示「重要文化財と岡山大学」を行いました。企画立案と資料展示、会場設営を人文系博物館実習生約30名が検討・実践し、解説パネルを博物館展示論受講生約60名で議論・作成しました。展示会場が図書館の明るいラウンジであるため照度のコントロールが難しく、貴重な資料の保存と公開について考えるきっかけともなりました。

今回の一連の取り組みにより、学術資料の保管と公開の必要性と難しさを学生が体験できたことは、学芸員課程の実践的学びとして意義があります。同時に、大学における学術資料の豊かな可能性を広げるために、「大学博物館」を含めた新たな体制作りも模索すべき時期にきているのではないかと思います。

2014.12.3~12

第2回学芸員課程企画展「重要文化財と岡山大学」



図書館の受付に近い開放的なラウンジを、展示のための学修スペースとして活用。壁面パネル5枚、展示ケース1台というシンプルな構成でしたが、文章の書き方から資料の展示方法まで、学生の試行錯誤のあとがみられました。展示した資料は、楯築弥生墳丘墓の特徴的な土器類です。展示にあたっては、図書館職員の皆様にご支援いただきました。

NEWS & TOPICS

■第4回学芸員課程ランチタイム企画「トーク・ミュージアム」を開催

2015年1月21日に文学部学芸員課程ミュージアム教育実習室にて第4回「トーク・ミュージアム」を開催。美学が専門の岡本源太先生（文学部）より、「ルーヴル、世界最初の美術館？」と題してお話いただきました。トークでは同美術館の成り立ちからお役立ち情報まで幅広くカバー。



編集後記

第4号は2014年度プロジェクトに基づく第2回学芸員課程フォーラムおよび展示会を特集しました。短期間に校正いただいた講演者の皆様へ感謝申し上げます。講演要旨作成にあたっては、学芸員課程の学生の協力を得ました。